

## ◆ 今週のコメント

- ・ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎の定点当たり報告数は1.22で、過去5年平均値(0.78)を上回る値となっています。行政区別にみると、特に南区(8.67)で多く、全市の報告の52.0%を占めています。年齢階級別にみると、7歳が26.0%と最も多くなっています。
- ・ 手足口病の定点当たり報告数は0.41(17例)で、過去5年平均値(0.11)を上回る値となっています。行政区別にみると、特に南区で多く、全市の報告の70.6%を占めています。年齢階級別にみると、4歳が7例(41.2%)と最も多くなっています。
- ・ ウイルス性肝炎(B型)の報告が1例で、本年初めての報告です。平成19年のウイルス性肝炎は、年報告数が6例(男5例、女1例)で、病型はB型3例、C型3例となっています。推定感染経路は、B型は、全て性行為感染(異性)で、C型は、不明2例、血液関連1例となっています。

## ◆ 今週のトピックス:<アメーバ赤痢>

- ・ 今週の報告は3例で、本年の累積報告数は5例となっており、過去8年間の同時期(0～3例)と比較して最も多くなっています。詳細はトピックスに掲載しています。

## ◆ 発生状況

### 全数報告の感染症

- ・ 二類:結核 なし【1月以降の累積報告数 50例(喀痰塗抹陽性 14例)】
- ・ 五類:アメーバ赤痢(腸管アメーバ症 2例、腸管外アメーバ症 1例)
- ・ 五類:ウイルス性肝炎(B型) 1例(第6週追加分)
- ・ 五類:後天性免疫不全症候群(無症候性キャリア) 1例(第7週追加分)

### 定点報告の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点68、小児科定点41、眼科定点10、基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ*	インフルエンザ	4.87	331
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	6.66	273
	② A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.22	50
	③ 水痘	1.17	48
	④ 手足口病	0.41	17
	⑤ 突発性発しん	0.24	10
眼科	流行性角結膜炎	0.30	3

### 病原体情報

(検体名は、紙面の都合上、咽頭ぬぐい液をNP、糞便をFC、髄液をSF、尿をURと略す。)

検出病原体(報告数)	臨床診断名(採取週)	検体名	検出病原体(報告数)	臨床診断名(採取週)	検体名
インフルエンザウイルス AH1型(2)	インフルエンザ(第6週)	NP	ノロウイルスGII(2)	感染性胃腸炎(第7週)	FC
アデノウイルス 2型(2)	かぜ症候群(第4・5週)	NP			

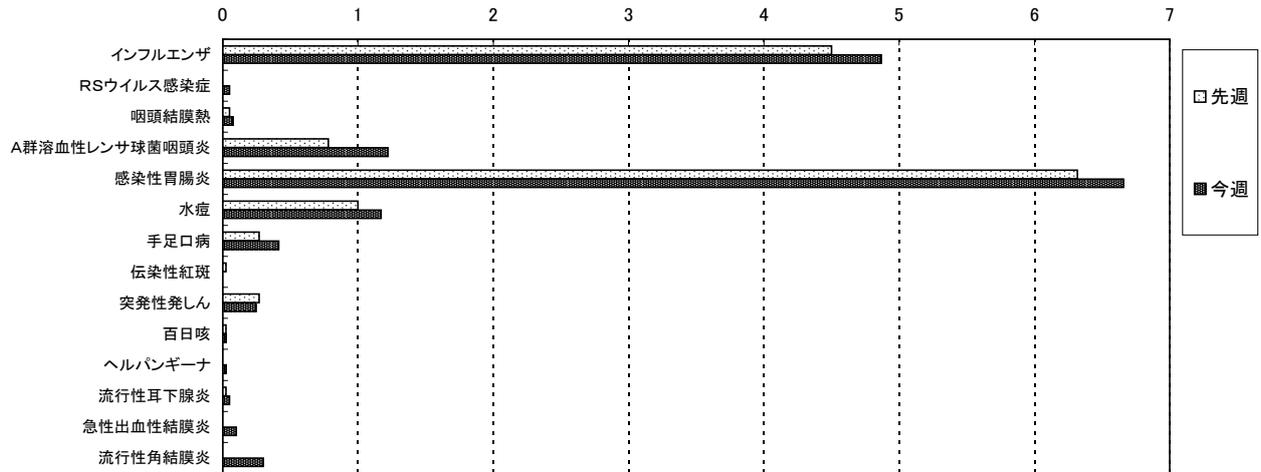
## 【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス:<アメーバ赤痢>

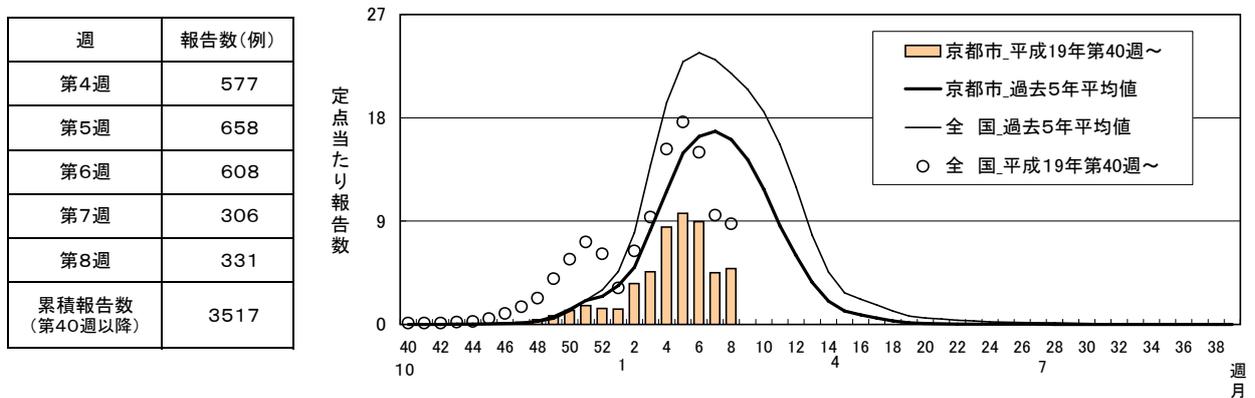
(注)京都市のデータは、平成20年2月29日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。  
また、本情報での患者数は、届出医療機関所在の保健所での集計で、患者の住所を示すものではありません。  
病原体情報は、病原体定点等から京都市衛生公害研究所へ搬入された検体から検出された病原体です。

# ◆ 発生状況の概況グラフ

## 1 今週(第8週)と先週(第7週)の定点当たり報告数の比較

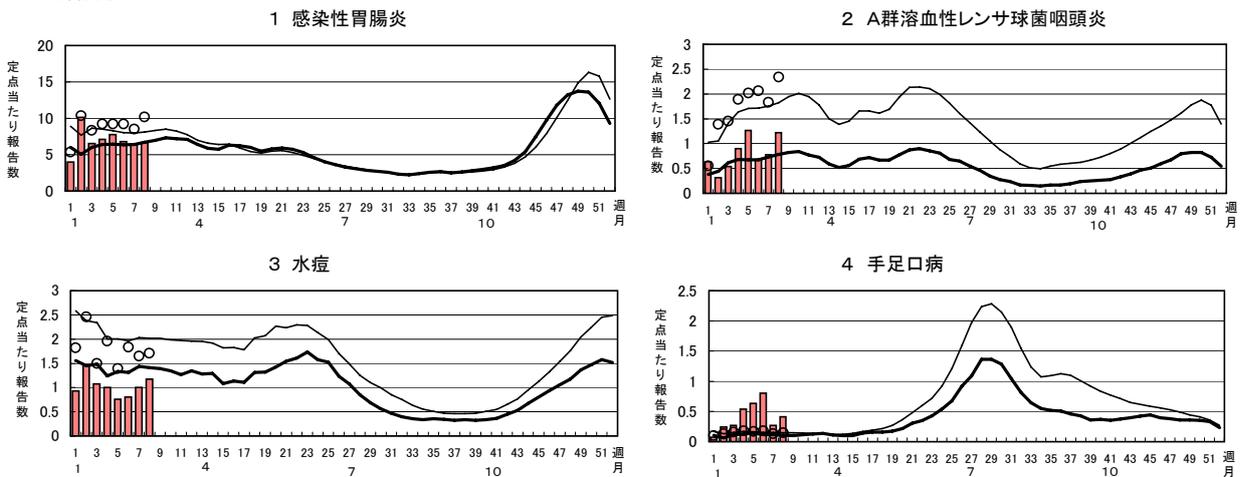


## 2 インフルエンザの定点当たり報告数の推移

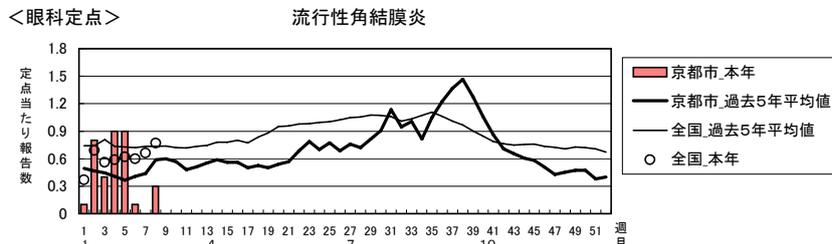


## 3 主な感染症(小児科)の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>



<眼科定点>



# 今週(第8週)のトピックス: <アメーバ赤痢>

今週の報告は3例で、本年の累積報告数は5例となっており、過去8年間の同時期(0~3例)と比較して最も多くなっています。診断年別推移をみると、特に平成16年以降の報告(17~22例)が多く、昨年の平成19年は、調査開始時(平成11年第13週)以来、最も多くなっています。全国でも、平成16年以降、報告数が600を超えており、平成19年が最も多くなっています。

平成18年4月に開始された病型別をみると、重篤な症状を呈する腸管外アメーバ症の年報告数は1~3例となっています。

次に、「本年」、平成16年から19年(以下「過去1」)及び平成12年から15年(以下「過去2」)の3期間をそれぞれみると、年齢群別では、「本年」は、20歳代から50歳代に報告があります。「過去1」と「過去2」を比較すると、「過去1」の方が「過去2」に比べ40歳代、60歳以上の年齢層で報告が多くなっています。性別ではどの期間も男性で多くなっています。

推定感染地域別では、「本年」は全て国内での感染で、「過去1」と「過去2」を比較すると、「過去1」の方が国内での感染の割合が多くなっています。

推定感染経路別では、「本年」は、性行為感染が最も多く、「過去1」、「過去2」を比較すると、不明の割合が減少し、性行為の割合が多くなっています。

## 診断年別推移

診断年	京都市		全 国
	第1~8週	年報告数	年報告数
平成11年 (第13週以降)	—	2 (0)	276
平成12年	0	7 (1)	378
平成13年	0	6 (2)	429
平成14年	3 (0)	12 (0)	465
平成15年	0	8 (2)	520
平成16年	1 (0)	18 (2)	610
平成17年	3 (1)	17 (4)	698
平成18年	0	17 (4)	602
平成19年	3 (1)	22 (5)	781
平成20年	5 (1)	—	—

( ) 内は女

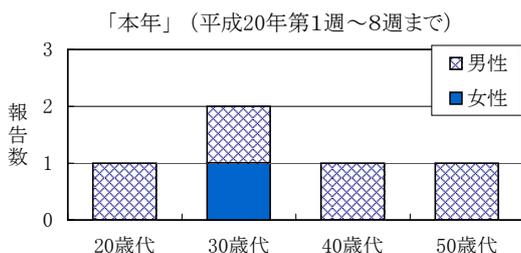
## 病型別報告数

(平成18年に追加された分類)

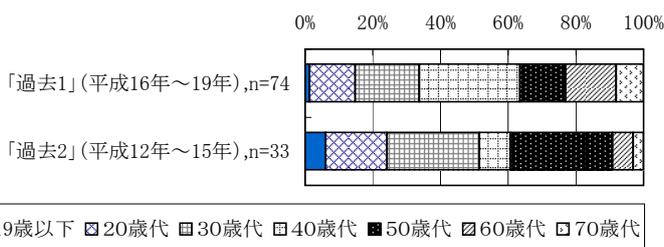
	平成18年		平成19年	
	男	女	男	女
腸管 アメーバ症	10	4	15	5
腸管外 アメーバ症	3	0	2	0

	平成20年(第8週まで)	
	男	女
腸管 アメーバ症	3	1
腸管外 アメーバ症	1	0

## 京都市の性別年齢群別累積報告数 (n=5)



## 京都市の過去の年齢群別累積報告数の比較



## 推定感染地域及び推定感染経路別累積報告数

項目名		「本年」 (平成20年第1週~8週)		「過去1」 (平成16年~平成19年)		「過去2」 (平成12年~平成15年)		
		京都市(n=5)		京都市(n=74)		京都市(n=33)		
		男	女	男	女	男	女	
推定感染地域	国内	4	1	47	13	16	2	
	国外	0	0	10	2	7	2	
	不明	0	0	2	0	5	1	
推定感染経路	性行為	同性	1	0	7	1	1	0
		異性	2	* 1	10	4	2	1
		不明	0	0	3	0	0	0
	経口	0	* 1	15	5	6	3	
	その他	0	0	2	1	0	0	
	不明	1	0	22	4	19	1	

\* 複数回答